

踊り、歌い、祈る

— 香川に伝わる民俗芸能と祭り —

モモテ
1月~3月



歌舞伎
春



念仏踊
8月



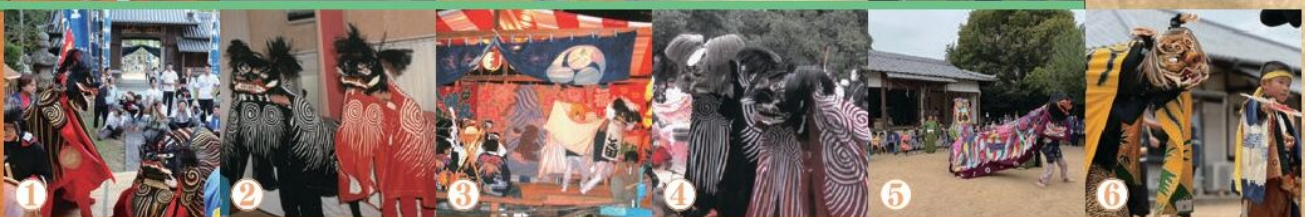
小歌踊
夏



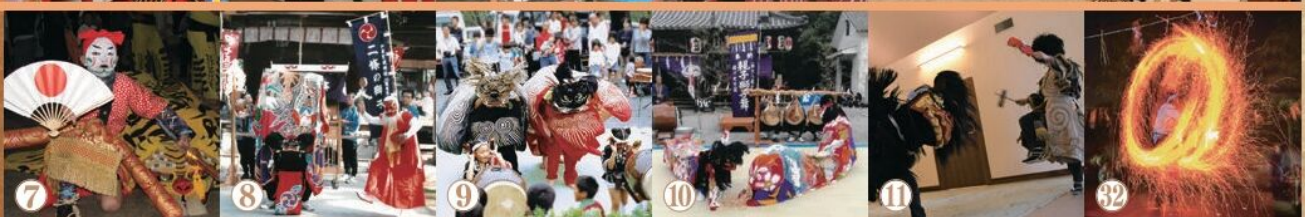
盆踊り
8月



獅子舞
10月頃



獅子舞・神楽³²
10月頃



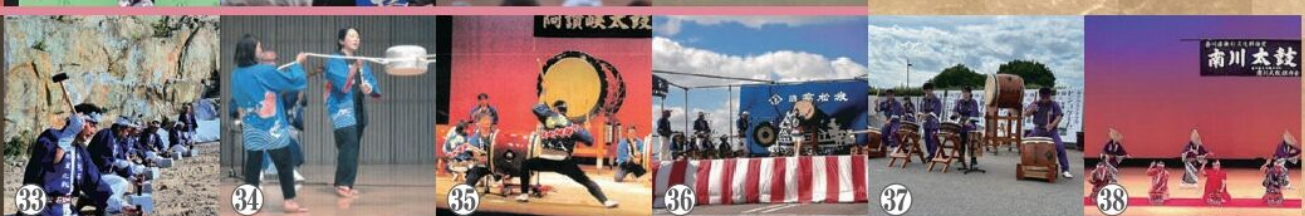
秋祭り・
祭礼行列
10月



人形浄瑠璃・
蹴鞠⁴⁶
通年



民謡・太鼓
通年



変化する獅子舞 —瀬戸内が育んだ「獅子舞王国」讃岐の物語(①~⑪)

◆日本における獅子舞の起源

日本の獅子舞は、7世紀ごろ、中国大陸から伝えられた芸能が起源とされています。奈良県の正倉院には、8世紀のものと思われる獅子頭が残されており、当時は「伎楽」と呼ばれる仮面劇の中で用いられていました。

◆中世香川にみる獅子舞の記録

香川県における獅子舞の最古の記録は、永和元年(1375)にさかのぼります。土庄町の富丘八幡神社で行われた「行道」という仏教儀礼に、獅子が登場したことが記されています。この時代の獅子は、現在のように太鼓や鉦に合わせて激しく舞うものではなく、僧侶の行列とともに仏堂の周囲を巡る、宗教的な儀式の一部でした。

◆中世獅子舞を伝える獅子頭

中世の獅子舞を今に伝える資料として、東かがわ市の水主神社には、文安5年(1448)に奉納された木製の獅子頭(県指定有形文化財)が残されています。また、普通寺市の大麻神社にも、中世後期のものと考えられる獅子頭が伝えられており、当時の獅子舞の姿を知る手がかりとなっています。



木造獅子頭

◆江戸時代以降の獅子舞の変化と広がり

江戸時代の中ごろになると、紙製の軽い獅子頭が作られるようになります。木製に比べて扱いやすかったことから、動きの激しい舞いが可能となり、現在につながる躍動的な獅子舞が広まっていったと考えられています。さらに江戸時代後期から近代にかけて、讃岐では獅子舞の数が急増します。かつては氏子地区全体で一頭の獅子を交代で奉納する「トウヤジシ」と呼ばれる形が主流でしたが、やがて各地区ごとに獅子組が組織され、毎年それぞれが獅子舞を奉納するようになります。

こうした変化の積み重ねによって、香川県は全国でも類を見ない獅子舞の密集地帯となり、「獅子舞王国讃岐」と呼ばれるまでに広がりました。

◆歌舞伎に影響を受けた獅子舞

正徳年間に歌舞伎「国姓爺合戦」が上演され人気を博すと、その物語が獅子舞にも取り込まれ、和藤内による虎獅子退治の物語が上演されるようになります。全国では、東北や東海地方、熊本県などに点在しているほか、香川県では白鳥の虎頭の舞(⑦)、筒野虎獅子(⑥)、和藤内獅子舞(⑪)などがこの虎獅子を伝承しています。



◆香川県の獅子舞、その遣い方の多様性 —一頭遣い・夫婦獅子・親子獅子

香川県の獅子舞は、ほとんどが「一頭遣い」といって、二人で一頭の獅子を動かして遣う形が一般的です。東かがわ市やさぬき市の一部、普通寺市や三豊市の北部などで「二頭遣い」といって、二頭の獅子を舞わせるところもあります。二頭で舞う様子がオスとメスに見えることから、「夫婦獅子」と呼ばれるようになったのでしょう。

また、「親子獅子」については、綾川町のあたりでは、昔は毎年違った工夫をして獅子舞を神社などに奉納していたことが、地元に残る記録からわかっています。その文書には「志々つかい」や「子志々つかい」といった言葉も何度か出てくるので、ある年の工夫がそのまま獅子舞の型として残ったのではないかと考えられています。



一頭獅子(才田岩陰獅子舞③)



夫婦獅子(家浦二頭獅子舞⑧)



親子獅子(綾南の親子獅子舞⑪)

獅子の流派分布図

- 牡丹くずし ◆高松市西部 ◆三木町 ◆高松市東部
- 平獅子(ひらし) ◆さぬき市西部 ◆三木町 ◆丸亀市綾歌町
- 白山流 ◆高松市(多肥・太田・伏石など) ※「白山流牡丹くずし」と言うこともあります。
- 喜多流 ◆高松市(香川町・権紙・飯田・鶴市・瀬東)
- ねぜり五段 ◆高松市(東角・成合以南・一宮以西・香南町・香川町・国分寺町) ◆綾川町 ◆坂出市府中町
- 立ち五段 ◆高松市(香東川以西・中瀬以南・香南町・国分寺町) ◆綾川町 ◆坂出市府中町
- 中五段 ◆坂出市府中町
- 五段・曲 ◆坂出市(高屋・大屋富川以南) ◆丸亀市(東部・南部) ◆普通寺市北町
- 五段・みたち ◆坂出市東部 ◆丸亀市綾歌町の一部
- 五段・ヒラジシ ◆丸亀市綾歌町
- みたち流 ◆高松市(香川町)「みたち流」(国分寺町の一部) ◆綾川町の一部 ◆坂出市府中町 ◆丸亀市「みたち流」 ◆丸亀市 ◆普通寺市
- 十二通り ◆普通寺市
- 小笠原流 ◆三豊市北部(三野町・宅間町・仁尾町・高瀬町北町) ◆多度津町の一部
- 狸々くずし ◆三豊市(高瀬町南部・山本町・財田町) ◆丸亀市(旧神南の一部・溝邊の一部) ◆丸亀市(旧綾歌町南田)
- 大獅子 虎獅子 ◆東かがわ市 ◆さぬき市東部
- 大獅子 ◆三木町 高松市香川町・香南町 ※大人数で舞つものもいます。上記の大獅子とは異なります。
- 念仏くずし ◆高松市勸使町
- 天満ねずみ流 ◆丸亀市山崎
- 二頭獅子 ◆東かがわ市 ◆さぬき市東部 ◆普通寺市 ◆琴平町直田 ◆三豊市北部 ◆観音寺市一部 ※地域・獅子組によっては麒麟(しんぎ)獅子・夫婦獅子などと言われています。
- 一人獅子 ◆高松市一部

20種類以上の舞



※上記以外の地域には「名称なし」の獅子舞が多く存在します。また名称が未確認のものもあります。区分、名称は大まかな目安としてご覧ください。提供：讃岐獅子舞保存会

コラム

なぜ獅子舞の流派は名付けられたのか

獅子の流派ほどややこしいものはない。他地域から様々な流派の獅子舞が伝わり、そこから派生したり更なるアレンジが加えられるなど系統が追えない。ただ、ヒラジシと牡丹くずし、みたちと五段などのように二種類の流派がある地域ではどちらかが古くからあって、後にもう一つが新しく入ってきたということが伝承から見えてくる。そして新しい流派に変更した場合、以前のものとの区別が必要であり、流派の呼び名があらわれてきたとすれば、流派の名称を伝えていない地域は他からの新しい芸の流入がみられず、古いままの遣い方がそのまま残っているのではないかとも思われる。

獅子の晴れ着〈ユタン〉の変遷 —素朴な布から絢爛たる武者絵へ

獅子の胴体にあたる部分の布を全国では胴幕、マク、ホロ、カヤ等と呼んでいるが、香川県ではユタンと呼ぶことが多い。その図柄にはさまざまなものがあるが、もともとは三木町や多度津町で見られた布団や着物の生地のようなものだったが、東かがわ市やさぬき市大川町、坂出市東部、観音寺市などで多く見られる、さまざまな色を駆使して毛の模様をデザインしたものがあらわれ、更に今日見られるような武者絵などを描いた派手なものになってきたと思われる。絵柄のユタンはおそらくは節供の武者幟などからの発想と思われるが、獅子が増えてくるとともに、他との違いを際立たせようと多種多様な図柄が生まれてきたのではないだろうか。この傾向は現在でも見られ、次々と新しいオリジナルのユタンも登場してきている。ユタンの別名をキモノとも呼んでいるが、まさに獅子の晴れ着である。



着物様のユタン(さぬき市)

カラフルな模様の油傘(尺経獅子舞⑤)



武者絵を描いたユタン(綾川町)

丸亀市から普通寺市の一部では、黒い毛を付けたユタンで獅子を舞う「毛獅子」が伝承されている

楽しめる人形浄瑠璃と歌舞伎 — 伝統にかける情熱の芸能(12~18)

◆人形浄瑠璃の成立 — 二つの芸能の結合

人形浄瑠璃は、「人形を使った芸」と「浄瑠璃と呼ばれる語り物音楽」が結びついて成立した芸能です。この二つは、それぞれ異なる系譜をもって発展してきました。人形芝居の源流とされるのが、「くぐつ」と呼ばれる芸能です。くぐつは平安時代に、人形を用いた芸を披露しながら各地を巡った芸能民で、後の人形芝居の基礎を形づくりしました。中世から近世初頭にかけては、兵庫県西宮の戎神社を中心に、「えびすかき」と呼ばれる人形芝居の集団が現れます。彼らの人形芝居が、語り物として発展していた浄瑠璃と結びつくことで、「人形浄瑠璃」という芸能が誕生しました。

◆人形芝居との交流

阿波(徳島県)や淡路(兵庫県淡路島)といった人形芝居の本場に隣接する香川県では、古くから人形芝居の一座が来訪し、これに接する機会が多ありました。とくに島しょ部では、淡路の福永幾太夫の一座が、春の鯛網漁の時期になると小豆島の坂手を皮切りに、直島、塩飽諸島、仁尾周辺まで巡業していたことが知られています。その人気ぶりは、「麦はうれるし福永は帰る 何をたよりに麦刈るか」という歌にもうかがえ、人形芝居が人々の生活に深く根付いていた様子が伝えられています。讃岐本土側には、主として阿波から人形芝居の一座が訪れました。また、正月の三番叟まわしやえびすまわし、さらに「ハコデコ」と呼ばれる簡易な人形芝居なども数多く巡っていました。やがて、こうした芸能に触れた地元の器用な人や同好の仲間たちが、見よう見真似で人形芝居を行うようになり、浄瑠璃の流行とも相まって、地域内での伝承が次第に盛んになっていったと考えられます。



伊吹島(観音寺市)では、現在でもイリコ漁解禁の時期になると、阿波木偶箱まわし保存会が綱元を廻って門付けを行っている。

◆年中行事と結びつき 定着した人形浄瑠璃

人形浄瑠璃は、田休みや野廻り(直島)、地藏まつり(円座)など、さまざまな年中行事と結びつきながら受け入れられていきました。このようにして人形浄瑠璃は、単なる外来芸能にとどまらず、地域の暮らしや信仰の中に溶け込み、地域の年中行事の一部として定着していったものと考えられます。

◆歌舞伎の誕生 — 出雲阿国とかぶき踊

歌舞伎の始まりは、慶長8年(1603)に出雲阿国という女性が上演した「かぶき踊」にさかのぼるとされています。阿国は出雲大社の巫女を名乗り、男装して茶屋の娘と戯れる演技をするなど、当時としては型破りな演技を行いました。この「かぶき踊」は大きな人気を博し、阿国にならった歌舞伎の一座が各地に生まれていきます。

◆禁止と変化を経て成立した歌舞伎

一方で、幕府は「かぶき踊」が風紀を乱すものと考え、たびたび上演を禁止しました。こうした統制の中で、歌舞伎は形を変えながら発展していきます。元禄時代(1688~1704)になると、現在に通じる歌舞伎の様式が整えられ、本格的な演劇として確立しました。この時代には、近松門左衛門という優れた脚本家が登場し、「曾根崎心中」や「国姓爺合戦」など、今日まで上演され続ける名作が生み出されました。

◆香川県における農村歌舞伎の広がり

香川県には、江戸や上方(京都府、大阪府)で栄えた歌舞伎が持ち帰られ、地域の人々による「地芝居」が盛んに行われるようになり、これらは、上方歌舞伎の影響が強く見られる点の特徴です。なかには、東谷の祇園座の「寿式三番叟」や、小豆島に伝わる「壺坂靈験記」の雁九郎、「封印切」の由兵衛など、現在の中央の歌舞伎ではほとんど上演されなくなった古い型を伝えるものもあります。これらは、歌舞伎文化の伝播や変遷を考えるうえで、きわめて貴重な資料といえます。



祇園座⑨三番叟

◆地域独自の演目と上演形態

さらに、小豆島に伝わる島出来と呼ばれるオリジナルの芝居や、東谷の衣裳を見せる「衣裳山」など、土地独自の演目や演出を今に伝えている点も重要です。だんじりの上で歌舞伎を上演する例としては滋賀県の長浜まつりがよく知られていますが、東かがわ市の白鳥だんじり子供歌舞伎は、瀬戸内地域で唯一、だんじりの上で歌舞伎を上演する貴重な事例です。



白鳥だんじり子供歌舞伎⑩

◆芝居にかけた人々の情熱

このように、香川県に伝えられてきた歌舞伎や地芝居には、江戸や上方の芸能を受け継ぎながらも、地域の工夫や創意を重ねてきた歴史があります。そこからは、芝居を愛し、守り伝えようとしてきた地域の人々の強い情熱を、今もなお感じ取ることができます。

人形浄瑠璃

香翠座デコ芝居⑫

天保4年より高松市円座町に伝えられる。「近頃河原達引」での猿回しや「壺坂靈験記」での傘踊りなど、独自の演出を残している。



讃岐源之丞⑬

三豊市三野町に伝えられる。明治期に初代三好三昇によって結成され、現在では初代から数えて四代目の人たちによって受け継がれている。



直島女文楽⑭

直島町に伝えられる。天領であった直島では芸能が盛んにおこなわれていた。戦後女性だけで一座を組んだことから、女文楽と呼ばれている。



デコ芝居(中山農村歌舞伎保存会⑯)

小豆島町中山に伝えられる。一般に人形浄瑠璃は三人で一体の人形を遣うが、中山のデコ芝居は人形の腕に遣い手の腕を通し、一人で一体の人形を遣うという、極めて珍しい特徴を持っている。



農村歌舞伎

祇園座⑮

高松市香川町東谷に伝えられる。独自の寿式三番叟の演出を残しているほか、衣裳そのものを見せる「衣裳山」といった独自の演目も伝えている。



白鳥だんじり子供歌舞伎⑰

東かがわ市白鳥に伝えられる。江戸時代以来、白鳥神社に奉納されてきた歌舞伎であり、子どもがだんじりの上で公演を行うという特徴を持つ。



小豆島農村歌舞伎

中山農村歌舞伎⑯・肥土山農村歌舞伎⑱
小豆島では古くから京都・大坂との交流が深く、江戸時代末期から明治期にかけて島内で歌舞伎が盛んに行われた。テレビなどの娯楽の発達に伴い、その多くは廃れたが、小豆島町中山、土庄町肥土山が現在も伝承を続けている。演出に上方歌舞伎の古い型が残り、芸能の伝播を考えるうえで貴重な資料となっている。令和6年3月には、中山農村歌舞伎、肥土山農村歌舞伎は、重要無形民俗文化財に指定された。



肥土山農村歌舞伎



中山農村歌舞伎

祈る念仏踊と小歌踊 ― 願いをこめてひとおどり (19~26)

◆念仏踊とは一祈りと踊りが結びついた芸能

念仏踊とは、「ナムアミダブツ」と念仏を唱えながら踊られる芸能で、死者の供養や地域の安泰を願って行われてきました。信仰と芸能が深く結びついた行事であり、中世以降、各地に広がっていきました。香川県でも古くから念仏踊が盛んで、滝宮神社・天満宮(綾川町)への奉納をはじめ、大川念仏踊や高見島のなもで踊りなど、多様な念仏踊が伝承されてきました。

◆滝宮神社に奉納された念仏踊の系譜

滝宮神社には、かつて多くの念仏踊が奉納されていました。代表的なものとして、滝宮の念仏踊(22綾川町)、北条念仏踊(坂出市)、坂本念仏踊(19丸亀市)、南鳴念仏踊(22多度津町)、七箇念仏踊(まんのう町、明治初期に衰退)などが挙げられます。これらの念仏踊は、江戸時代の郡単位で踊り組が構成されており、母体となる組織の範囲が広がったことが、香川県の念仏踊の大きな特徴です。滝宮神社に奉納される念仏踊の由来としては、菅原道真が雨乞いを行い、それが成就したことを喜んで踊られたもの、また道真没後の供養のために踊られたものとする伝承が残されています。また、干ばつ時には雨乞い踊りとしても踊られたほか、亡くなった人の供養のためのアラレオドリも踊られました。

◆大川念仏踊(20)―雨乞いを目的とした踊り

大川念仏踊は、まんのう町の大川山頂に鎮座する大川神社に奉納される念仏踊です。寛永年間、高松藩の家老から大川神社に鉦が寄進され、その銘文に「為雨請也」、つまり雨乞いのために奉納する、と刻まれていることから、この頃に雨乞い踊りとして形づくられたものと考えられています。大川山は水を司るとされる龍の神がいるとされ、土器川流域では古くから水の神として信仰を集めてきました。そのため、大川念仏踊は雨乞いを主な目的とする点で、滝宮系統の念仏踊とは異なる雨乞い信仰を持っています。

このように、香川県の念仏踊は、同じ念仏踊でありながら、奉納先や目的、成立の背景によって異なる性質を持っています。



念仏踊の由来



大川念仏踊の鉦

地元には「奉寄進讃州宇多郡中戸大川権現鐘鼓数三十五但為雨請也惟時寛永五戊辰歲」という銘が刻まれる鉦も存在する。

◆小歌踊とは一心を映す踊り

小歌踊とは、室町時代以降に流行した歌である小歌を歌いながら奉納される踊りです。その歌詞には、恋をした人の切ない心情や、姑にいじめられる女性の嘆きなど、人間の日常的な感情や苦悩が率直に表現されています。そのため、時代を超えて、現代に生きる私たちにも共感できる内容が多く含まれています。

◆水と祈り―香川における雨乞い小歌踊

水不足に悩まされてきた香川県では、雨や水に関する小歌を歌いながら、雨乞いを行う踊りが各地で伝えられてきました。小歌踊は、生活に直結した切実な願いを神に届ける行事として、大切に受け継がれてきました。

◆宗教者の来訪と雨乞い成就の物語

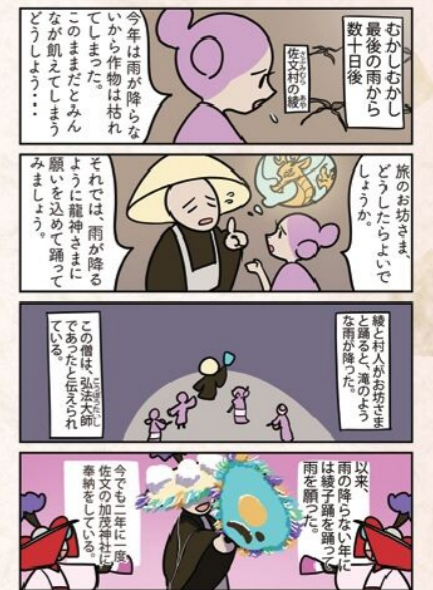
綾子踊(23)は、弘法大師空海が雨乞いを成就させたことを由来とすると伝えられています。また、和田雨乞踊(26)・田野々雨乞踊(24)も、薩摩法師と呼ばれる宗教者が雨乞いを成就させたことを起源としているほか、彌与苗踊・八千歳踊(25)にも、近江(滋賀県)の依藤太秀郷が大百足を退治した功績により雨を降らせたといわれています。これらの踊りには、村の外から来た宗教者が祈りによって雨をもたらすという共通した構造が見られます。

◆綾子踊にみる雨乞い踊の信仰性

綾子踊については、江戸時代の地誌「西讃府志」に「早ノ時此踊舞ヲスレバ必驗アリ」、すなわち日照の際にこの踊りを行えば必ず雨が降ると記されています。この記述からは、綾子踊が単なる芸能ではなく、水不足を解決する有効な手段として人々に強く信頼されていたことが分かります。

◆念仏踊との関わり

綾子踊を伝えるまんのう町佐文では、江戸時代中期に七箇念仏踊の踊り組に参加していたことが記録に残されています。踊りの中心的役割を担う人物を芸司(ゲイジ、またはゲンジ)と呼ぶ点や、大団扇を用いる点などに共通性が見られることから、綾子踊は念仏踊の影響を受けていると考えられています。



綾子踊の由来

コラム

滝宮神社とその信仰の多層性 牛頭天王と無念の霊による 災厄を防ぐ祈り



牛頭天王の札

滝宮牛頭天王社(現・滝宮神社)は牛馬の守護神として広い信仰圏を持っています。昔は讃岐国中に祈禱札を配布したとも伝えられ、東かがわ市引田の旧家から出た御札を納めた俵の中から「滝宮牛頭天王」と刷られた絵札が沢山見つかり、この伝承を裏付けている。また、滝宮神社のそばには綾川の深い淵があり、その底は阿波の鳴門や龍宮まで通じているとも伝えられ、水の神の信仰も伝えていた。更に隣接する天満宮には無実の罪で九州に流され無念のうちに亡くなった菅原道真が祀られており、この世に念を残して亡くなった者が災いをおこすという御霊信仰が加わり、今のような姿になったのではないと思われる。実りの秋を前に病気が流行しやすい夏に種々の災厄がおこらぬよう供養をするともに、秋以降の平穏を祈ったのであろう。各地で行われていた念仏踊が滝宮へ奉納するようになったのも、こうした信仰の広がりや影響しているのではないだろうか。

コラム

小歌踊の伝承から見る 宗教者の足跡

綾子踊に代表される小歌踊は中世末～近世初頃に流行した小歌で踊られる芸能だが、その分布は仲多度郡西南から旧三豊郡南部に限られるという特色を持っている。その歌われている歌には「花籠」(綾子踊)と「花籠たまず踊」(さいさい踊)、「六調子」(綾子踊)と「ごとう雨踊り」(さいさい踊)、「塩飽船」(綾子踊)と「塩飽」(和田雨乞踊)など共通するものも多く、お互い何かしらの影響(交流)があったと思われる。また、これらの踊りを伝えた人は「弘法大師」(綾子踊)、「都から来た女性」(同)、薩摩法師(和田・田野々雨乞踊)、仁尾の山伏(さいさい踊)といった他所から訪れてきた人だと伝えている。このような伝承からは踊りを伝えた芸能者が県の西南部に往来していた足跡を伝えているのではないと思われる。その昔の芸能の伝播を考えるうえにおいて興味深い。

供養する盆踊り —先祖の霊とともに踊り、心を通わせる(27~31)

盆踊りは、お盆に帰ってくる先祖の霊を慰め、送り返すための踊りです。盆踊りは、中世の念仏踊りから発展し、江戸時代に口説きや民謡とともに踊られるようになります。香川県では、明治期に盆踊り禁止令が出され、他県と比べても盆踊りが少ないと言われています。一方、島しょ部には古い盆踊りの形が残っているほか、小豆島や塩飽諸島には、新仏が出た家の家族等が位牌を背負って踊る風習が今も残っています。本土側では「一合まいた」が三豊・観音寺地域の一部を除くとよく踊られています。それ以外にもさまざまな踊りが行われています。東かがわ市では「一合まいた」と「大内踊り」、さぬき市では前記の他に「新名踊り」「網引き」が踊られます。香川郡南部では「一合まいた」「二つ拍子」「ちゃらちゃん踊り」「網引き」が、坂出市では「一合まいた」と「島踊り」が多く踊られています。三豊地域では「まぬけ」「じゅうたい」の二種類を踊るところが多く、一合まいたはほとんど踊られません。



櫃石島の盆踊り

◆口説きの盆踊り—庵治踊り②⑦・安田おどり③①

口説きとは、江戸時代の浄瑠璃の隆盛とともに流行する、物語を七七七五の文字数に区切って語っていく歌のことで、安田おどり、庵治踊りとはともに歌舞伎役者から習った振り付けとされており、地元で伝わる鈴木主水の心中(安田おどり)や那須与一の扇落とし(庵治踊り)などの物語を口説きにして歌います。



シカシカ踊り③

◆土器川流域に伝わる盆踊り

—岡田おどり②⑧・宇多津鹿島踊り②⑨・シカシカ踊り③①

土器川の中流域では「一合まいた」をはじめ「島踊り」「岡田踊り」「二つ拍子」「はたき(シカシカ)」など種類が多くなり、バラエティに富みますが、この地域では最後は必ずシカシカで終わる共通性があります。「宇多津鹿島踊り」「岡田おどり」「シカシカ踊り」は、土器川流域に伝えられる盆踊りの典型です。岡田おどりでは「島踊り」というところを宇多津鹿島踊りでは「鹿島踊り」と言ったり、シカシカ踊りでは「シカシカ」というところを、岡田おどりや丸亀市飯山町では「はたき」と言うなどの違いは見られますが、踊りや歌詞、節はともに共通しています。

コラム

讃岐盆踊りにみる供養のかたち



安田おどりの様子

盆踊りの第一義は仏の供養である。ホトケオドリ、アラレオドリなどと呼ばれる踊りが県内あちこちで聞くことができるが、特に島しょ部では今も色濃く残っており、「今年は亡くなった人が居らぬので踊りをしない」という島もある。安田おどりは現在では小学校校庭に設けられたショウロダナを挿んでから踊りにかかっているが、これは戦時中、踊りを続けるために時の自治会長が「英霊を迎えて供養する」という形式を考え出して、当局の許可を得た形式が続いているもので、それ以前は踊り子と三味線弾きがワカショウロの家を訪れて踊っていたという。また庵治おどりに「目連尊者」の口説があり、これは新仏の供養や戦死者の供養の時に踊っていたようである。

鎮める神楽 —荒ぶる神々を喜ばせる舞(32)

◆香川県における神楽の分布

香川県の神楽は、旧高松市および香川県以西に分布しており、木田郡以東では行われていません。また、島しょ部でも一部を除いて伝承は見られず、分布域が比較的限られていることが特徴です。

◆二つの系統—神職神楽とアミガサカグラ

香川県の神楽には、大きく分けて二つの系統があります。一つは、地域の神職が相寄って舞う神職神楽です。これは神楽分布地域のほぼ全域で行われています。もう一つは、神職ではない人々のみで行われるアミガサカグラ(編笠神楽)です。アミガサカグラは、高松市西部から旧綾歌郡東部にかけて伝承され、現在では平成の市町村合併以前の高松市西部6か所に分布しています。

◆演目みる共通性と独自性

両者の舞いの演目は共通するものも多く見られ、神職神楽の影響を受けながら編笠神楽が成立したものと考えられますが、編笠神楽には「からす」や「だしば」など、独自の舞いが伝えられています。また、「玉婆さん」や「四人兄弟」など、神職神楽ではほとんど行われなくなった演目が、現在も編笠神楽では伝承されている点も注目されます。

だしばは、大火とも書き、竹の両端に付けた火薬に火を灯し、回転させる演目であり、神職神楽には見られない編笠神楽独自の演目です。



だしば

◆香川県の神楽を特徴づける舞い

香川県の神楽に共通して見られる舞いとして、「狸々の舞(ひさごの舞とも呼ぶ)」と「上殿さん(鳥行とも呼ぶ)」があります。これらはいずれも他県の神楽にはほとんど見られない演目であり、香川県の神楽を特徴づける存在です。また、「岩戸の舞(ウズメとも呼ぶ)」についても、他県では手力男命や天照大神が登場し、「古事記」「日本書紀」に基づく岩戸開きの物語を演じるのに対し、香川県ではアメノウズメノ命の一人舞いとして構成されている点が大きな特徴です。

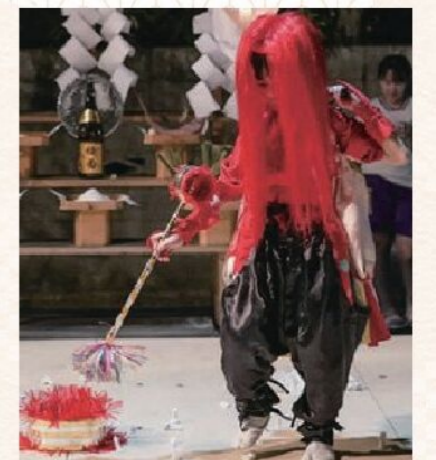
神楽は、一般的には秋祭りの宵に奉納されますが、地域によっては夏や初冬に行われる場合もあります。三豊地域では「ムギウラシ」と呼ばれ、麦が実る初夏に神楽が舞われる例も見られます。また、神楽の演目の一つである「狸々の舞」は、テンポの速い囃子とコミカルな動作から人気が高く、獅子舞の芸の中に取り入れられたり、この舞いのみが単独で演じられたりすることもありました。



岩戸の舞



国土地理院地図を使用(一部加筆)



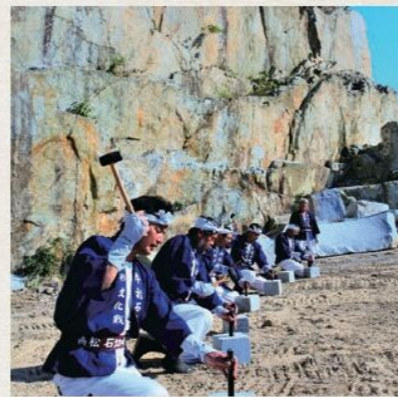
狸々の舞

働く人たちの民謡 —仕事の数だけ、歌があった時代(33・34)

民謡とは、人々の暮らしの中で自然に歌い継がれてきた歌の総称です。労働の最中に歌われた労働歌をはじめ、祭りや盆踊りの場で歌われた歌など、生活のさまざまな場面と結びついて伝承されてきました。かつての仕事の多くは道具を使った重労働であり、その苦労をやわらげたり、作業の調子を整えて仲間同士の息を合わせたりするために、歌は重要な役割を果たしていました。現在では、祭りや盆踊りの中で民謡が歌い継がれてきたほか、保存会を結成し、精力的な公演活動により歌を継承しています。

◆庵治石と石切り唄

香川県は花崗岩を産出してきた地域であり、小豆島、塩飽諸島、高松市牟礼町などで石切りが行われてきました。高松市牟礼町は、良質な花崗岩である庵治石の産地として知られています。大坂城や高松城の石材も、庵治から切り出され運ばれたと伝えられており、その過酷な作業の中で歌われてきたのが石切り唄です。現在も石切り唄保存会によって、石を切り出す際に歌われた唄が大切に受け継がれています。牟礼町の石切り唄は、北木島(岡山県)の石切り唄と類似しています。



石切り唄

◆地搗き作業と地搗き唄

高松市三谷町にある三谷三郎池では、古くから堤防を固めるための地搗き作業が行われてきました。この作業では、多くの人々が力をそろえて搗石を振り下ろす必要があり、作業のリズムを整え、息を合わせるために地搗き唄が歌われていました。現在では、讃岐民謡保存会によって、この地搗き唄が伝承されています。



讃岐民謡

◆保存会の活動と民謡の継承

これらの保存会はいずれも、昭和30年代以降に機械化が進み、労働の現場から民謡が急速に姿を消していくことに危機感を抱いた人々によって結成されました。人の声と動きが一体となって生まれた労働歌に耳を傾けると、当時の仕事の様子や現場の空気が、生き生きとよみがえってくるように感じられます。

コラム

失われゆく讃岐の唄

—香川県民謡の記憶と継承への願い—

香川県下にもかつてはさまざまな民謡が伝えられ、歌い継がれてきた。田植え唄、草とり唄、麦打ち唄、池普請の唄、櫓漕ぎ唄、大漁節、山行き唄といった作業唄の中には讃岐三白(砂糖・塩・綿)に関わる砂糖しめ唄、浜曳き唄、糸ひき唄などがあった。しかし、これらの唄のほとんどは祭りの唄など一部を除いて途絶えようとしている。舞台上に編曲されたものがなんとか伝承を伝えているものの、その歌い方も均一なものになってきつつある。民謡には本来正調などというものはなく、人によってさまざまな歌い方があった。それがまた民謡の一つの魅力であった。美声で朗々と歌いあげる人があれば、だみ声でも巧みな節まわしを駆使する人が居り、聞く人はそれぞれの唄に聞きほれたのである。そうした時代はもう望むべくもないが、少しでも地元で伝えられた唄に興味を持ち、伝えていってくれればと思っやまない。

祝い、喜びの太鼓 —名人芸が地域の歴史を伝える(35~38)

◆太鼓のはじまりと日本への伝来

日本では、古墳時代の遺跡から太鼓を打つ姿を表した埴輪が出土しており、この頃すでに太鼓がマツリなどの場で用いられていたことが分かります。飛鳥時代から奈良時代にかけては、現在も見られるような、皮で胴に留めた構造の太鼓が大陸から伝えられ、次第に日本各地の民俗芸能の中で用いられるようになりました。

◆庵治締太鼓 —一子相伝から地域へ

香川県に伝わる太鼓芸能にも、それぞれに由緒と特徴があります。庵治締太鼓は、約600年前に山陰地方から移り住んだ安長家によって、一子相伝で受け継がれてきたものです。明治末期から昭和にかけては、その技が地域の人々に広まり、現在に至るまで継承されています。

◆南川太鼓 —名人によって磨かれた芸

さぬき市大川町に伝わる南川太鼓は、寛政年間(1789~1801)に、地元の豪族であった頼富氏によって伝えられたとされています。幕末になると、頼富時蔵という名人の存在によって技が磨かれ、伝承地の内外で広く演奏されるようになりました。

◆阿讃峽太鼓 —更なる展開を生む芸

南川太鼓保存会のメンバーを中心に、若い人たちが馴染みやすいリズムを取り入れた阿讃峽太鼓が作られ、オーストラリアなどの海外公演を行ってきました。

◆松原太鼓 —祝いの場で響く太鼓

東かがわ市松原に伝わる松原太鼓は、江戸時代末期、兵庫県の家島の人々が当地に宿泊した際、宿の主人に豊漁を祝う太鼓を伝えたことに始まるとされています。その後、結婚式などの祝いの席で演奏されるようになりました。

◆演奏形態の違いと地域の個性

南川太鼓では、太鼓に加えてすり鉦が用いられる一方、庵治締太鼓や松原太鼓では、あたり鉦が使われるなど、それぞれに演奏形態の違いが見られます。こうした違いは、代々の太鼓名人たちの創意工夫によって生み出されてきたものであり、地域ごとの個性を今に伝えています。



庵治締太鼓



南川太鼓



阿讃峽太鼓



松原太鼓

コラム

暮らしの中にあつた太鼓

—宴席芸から地域芸能への系譜—

昭和末期頃までは、婚礼や名付け、厄の祝いといった宴席が自宅で行われることが多かった。こんな時、宴席もたけなわになると芸者衆の弾く三味線にあわせて器用に太鼓を打つ古老の姿が各地で見られた。誰に習ったのか聞いたことはないが、土地に伝わる器用な老人たちの技術が見よう見真似などで受け継がれてきたのであろうか。太鼓の芸というのは今よりもっと身近なところにあつたのである。南川太鼓などはその典型的な例であり、名手が何人も出て、その技術が洗練され受け継がれて地域に根ざした文化となつてきたのであろう。

庵治締太鼓や松原太鼓は他所からの伝播と伝えられているが、もともと「太鼓を打つ文化」が下地としてあつたからこそ、地元で受けつがれ、伝えられてきたのではないかと思われる。後年各地で盛んになった太鼓も、こうした太鼓を打つ文化の流れにあるのではなからうか。

感謝する秋祭り ― 豊穰を喜び、神々と饗宴する (39・40)

秋祭りは、秋に農作物の収穫を神様に感謝し、あわせて翌年の豊作を祈る祭りです。その起源は古代にさかのぼり、宮中では新嘗祭として行われてきました。

◆中世史料にみる香川県の秋祭り

香川の秋祭りについて確認できる最古級の史料として、「金毘羅大権現神事奉物惣帳(観応元年(1350)、金刀比羅宮蔵)があり、これには、頭人が祭りに際して道具を奉納したことが記されています。また、浪打八幡神社(三豊市詫間町)に伝わる文書には、明德2年(1391)に秋祭りの放生会における役割分担を定めた記録が残っており、現在に通じる秋祭りの原初的な形態が、すでに中世には成立していたことが分かります。

◆近世における秋祭りの発展

江戸時代に入ると、獅子舞や太鼓台、奴などの芸能が祭りで奉納されるようになり、近代にかけて祭礼行列は次第に華やかさを増していきました。こうして秋祭りは、神事としての性格を保ちながら、地域の人々が総力を挙げて参加する行事へと発展し、現在に見られる姿へと変化してきました。

◆祭りの比較―賀茂神社と木熊野神社の秋祭り

賀茂神社

仁尾浦が京都・賀茂神社の御厨(供え物を納める領地)であった頃、応徳元年(1084)に神様を仁尾浦の葛島に迎え、その後現在の場所へ移されたといわれています。

年寄中…賀茂神社では、中世以来、「年寄中」と呼ばれる経験豊富な人々が祭りを統括してきました。現在では、河田・堀田・鴨田・吉田・倉本の五苗、いわゆる「四田一本」の家から選ばれた10人の年寄が祭礼を差配し、頭人を籤によって決めていきます。※頭人とは、トウヤとも言い、祭りの準備や執行にあたって中心的な役割を担う人のことです。地域によっては、特定の家筋の者のみが頭人を務めることができる場合もあります。

オハケオロシ…オハケオロシとは、祭場を清め、神様を迎える行事です。頭人は年寄中とともに葛島へ行き、山桃と竹、砂を持ち帰り、家の玄関に砂を盛り、山桃と竹を立てて注連縄を張り祭場とし、神事を行い、神様を迎えます。

頭人の朝参り…祭りの一週間前から、頭人は毎朝神社に参拝するとともに、かつては注連縄を張った玄関から家に入り、他の家族は別の入り口から家に入っていました。神様を祀る頭人は特別な方法で身を清め続けなければなりません。

長床神事…神社境内の長床と呼ばれる建物で、年寄中、頭人、小学生の男の子が務める舞的によって行われる饗宴の神事で、初献の盃や餅吸い物の儀などを行ったのち、神様をお船に乗せて行列へ送り出すなど、定められた儀式を行います。

七度半の使い…お船に乗せた神様が神社に戻ってくることを知らせる天狗役に対し、頭人は酒を勧め、天狗は再び行列に戻ります。これを何度も繰り返すことを「七度半の使い」と呼びます。これは全国の祭りにみられる儀礼であり、古くは三豊市詫間町大浜のモチでも行われていました。

勸請
神様を別の場所から迎え、自らの地域に祀る

祭礼組織
祭りの中心役となる家筋の存在

神迎
臨時に神を迎えるための設備

潔斎
神様を祀るために身を清める

祭りの特徴

木熊野神社

弘法大師が紀伊国(和歌山県)の熊野神社から神様を迎えたと伝えられています。境内には熊野神社から移植されたといわれる榎の木が社叢をなし、県指定天然記念物となっています。

統組…木熊野神社では、氏子地区内を統組と呼ばれる五つの組(畦田組、下所組、大坂屋組、亀野組、御嘉例組)に分け、一年交代で祭りを執り行います。統組は水利組織を基盤として成立したと考えられており、それぞれに「元方」と呼ばれる中心的な家が存在します。

御神舎…祭りに際して、頭屋の家に御神舎と呼ばれる仮の社殿を建てます。これは神様を迎えるために臨時に作られる社殿であり、奈良県などではオカリヤと呼ばれます。

潮川神事…神社のそばにある出水で、頭屋などの各役はお清めをします。頭屋は米の入った御由留輪(後述)を出水で洗った後、御神舎に納めます。金刀比羅宮の秋祭りでも潮川神事が行われています。
※出水とは、地下の伏流水が湧き出る泉のこと

的板…的板とは、杉の板を集めて作った田の字型の的に竿を付けたものです。的板は、御旅所から神社へ戻る際、鳥居に打ち付けて壊され、その破片は田に挿すと豊作になると信じられ、氏子たちが競って持ち帰りました。

御由留輪…御由留輪とは、米をいれる小さな桶で、秋祭りでは米を御神体として扱います。神輿は、この御由留輪とともに頭屋の家から出発しますが、頭屋の家から神輿が出発することは、頭屋が神を祀る祭場になっていたことを示す貴重な伝承です。

コラム

讃岐のオハケ様々



高松市のオハケ

祭りに際し神を祀る頭屋の印としてオハケを立てるのは高松市中・南部を中心として、東は三木町、さぬき市志度、西は綾川町から坂出市府中、王越あたりまで分布している。長い竹の先に扇子三本と芋(麻の糸)をたらししたものをつけることが多いが、藁束に御幣を挿したものと五色の布をたらししたものなど、地域によって多少の違いがある。またトウヤノボリなどといって幟を頭屋の庭に立てるところもある。オハケは頭屋に立てることが多いが、丸亀市手島や三豊市詫間町香田などのように神社の齋庭に立てるところもある。オハケは祭りが終わると神社へ持って行く場合が多いが、三木町から綾川町にかけては神社がこの竹を細かく割って、苗代の水口に立てるゴオウサン(ゴーノミサン)をはさむ竹にするのがみられる。

祭りを彩る奴 ― 奴大国讃岐に至るまで (41・42)

香川県の秋祭りでは、神社から出発する祭礼行列において、神輿を先導する「奴」が登場することが大きな特徴です。全国ではおよそ600件の奴行列の事例が報告されていますが、そのうち約100件が香川県内の事例であり、香川県は全国でも有数の伝承数を誇っています。

◆江戸時代に成立した奴行列

奴は、江戸時代に参勤交代の影響を受けて祭礼に取り入れられたと考えられています。元禄年間(1688~1704)のものといわれる「金毘羅祭礼図屏風」には、金刀比羅宮の例大祭の様子が描かれており、そこには歌舞伎や人形浄瑠璃とともに、はさみ箱や毛槍などを持った奴行列が参道を進む姿が表されています。このことから、遅くともこの時代には、香川県で奴が奉納されていたことが分かります。また、宝永6年(1709)の大野原八幡神社(観音寺市大野原町)所蔵「八幡宮御輿幸行列次第」には、はさみ箱、台笠、大鳥毛など、現在でも奉納される奴の役が記されているほか、西鴨神社(坂出市加茂町)には、「天保七年(1836)の銘が入る立笠が残るなど、香川県では江戸時代から継続して奴が奉納されてきたことが確認できます。

◆行列の発展と奉納芸の多様化

時代が下るにつれて、祭礼行列は次第に華やかさを増し、太鼓台やだんじりのほか、幟さしやヤッシッシンなど、行列を彩るさまざまな奉納芸が加わっていきます。幟さしは、奴行列における長い槍を巧みに扱う所作の影響を受けて成立したとも考えられています。また、ヤッシッシン奉納の際に歌われる唄には、瀬戸内海に浮かぶ小豆島という地理的条件を背景として、約160キロ離れた和歌山県御坊市の御坊祭りと共通する囃子が見られます。

◆行列が育んだ香川県の民俗芸能

山本長刀踊りは、総社神社(坂出市)の祭礼行列に影響を受けたと伝えられており、このように各地の芸能が相互に影響を及ぼし合いながら、香川の豊かな民俗芸能が育まれてきたことが分かります。



金毘羅祭礼図屏風(金刀比羅宮蔵)



幟さし④



山本長刀踊り④



ヤッシッシン④

厄を祓うモモチ — 一年の安泰を弓射で祈る (43~45)

モモチとは、弓を射ることで悪霊を退散させ、一年の無事を祈る早春の祭りです。射手は、自作の的や厄年の人が奉納した扇子を狙って弓を射ち、見事に射抜くことで厄祓いが行われます。

モモチは、香川県では高松市香西町から観音寺市域にかけて分布しており、さらに愛媛県東部や徳島県三好・美馬郡にまで伝承が見られます。弓を射る神事は全国的に行われており、愛媛県中部では「弓祈禱」、関東地方では「オビシャ」などの名称で知られています。香川県内では、坂出市櫃石島や丸亀市広島では1月に、三豊市、観音寺市では3月(旧暦2月1日)に行われてきました。

◆頭人制度と文書が伝えるモモチの歴史

三豊市域のモモチは、頭人と呼ばれる人々が一年交代で神事を中心役を務める制度によって行われてきました。頭人たちが神事の作法や決まりごとを文書として残してきたことで、モモチの歴史が明らかになっています。たとえば、三豊市詫間町生里には、宝暦年間(1751~1764)に定められたモモチの作法や服忌に関する古文書が残されており、古くから行事が行われてきたことが分かります。また、同町大浜のモモチの様子は、丸亀藩の地誌「西讃府志」に詳しく記録されています。そこには、頭人が小屋に籠って身を清めたのちに弓を射ていたことや、弓射の後に神社から頭人の家まで「七度半の使い」(11p参照)が出され、その後、頭人の家で食事が行われたことが記されており、江戸時代の行事の具体的な姿を知ることができます。



シンザの舞(東島ももち祭43)

◆小笠原古流 — 香川県にのみ伝わる弓射の姿

香川県のモモチのうち、海岸部や島しょ部では、小笠原古流と呼ばれる弓射の流派が伝えられています。袴から肩を出し、腰を低く屈めた独特の姿勢で弓を射る点に特徴があり、このような作法は香川県以外には確認されていません。香川県のモモチのきわめて貴重な特徴といえます。



円形的的(大浜ももち祭44)

◆シンザの舞 — 新参射手を迎える儀礼

庄内半島の生里や栗島では、初めて射手を務める人をシンザ(新参)と呼びます。シンザは巻藁を背負い、「シンザの舞」と呼ばれるコミカルな舞を披露します。他の射手は「見いさいな、見いさいな、シンザの舞を見いさいな」と囃し立て、場を盛り上げます。



角形的的(櫃石ももち祭45)

◆円形的的、角形的的 — 地域ごとの特色

香川県のモモチでは、円形的的を作る例がほとんどですが、坂出市櫃石では角形的的が用いられています。また、櫃石島のモモチでは、行事の途中で射手に料理が振る舞われるほか、行事終了後には射手が真言を唱えながら島内を歩き、悪霊を祓うなど、特徴的な作法が伝えられています。

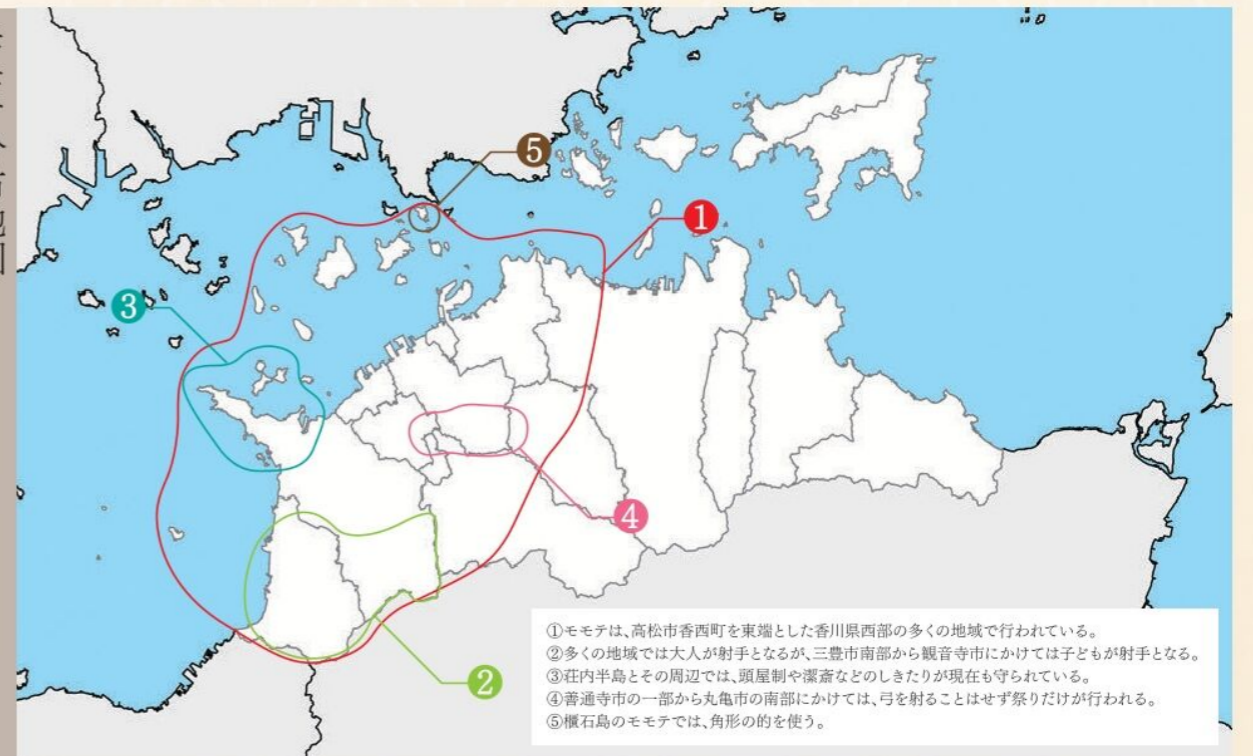
コラム

モモチの農耕行事的側面 — 讃岐各地に伝わる弓射の行事

モモチは県西部の三豊・観音寺地域でもっとも盛んに行われ、仲多度地域がそれに次ぐ。東へ行くほど伝承は薄くなり、その東限は高松市香西地域である。島しょ部では塩飽諸島あたりまで分布が見られるが、小豆島の一部(旧池田町)にもモモチの名称はないものの、かつては同様の行事が行われており(マト、天狗さんの的射り等)、今よりはもう少し広い範囲で行われていたようである。

地域的な特色として三豊北部は大人、同南部は子どもは射手を務める。普通寺市の一部から丸亀市南部にかけては弓射をとまわず、的と小さい紙幟を作って供えるところが多く、この幟は氏子が分け合って持ち帰り、田畑に立てていた。綾歌郡では神社の春祭をモモチと呼ぶ名称のみが残っている。モモチが行われるのは旧2月1日のタロウツイタチを中心とした早春の頃が多いが、正月に行われるところ(島しょ部に多い)や春の彼岸の頃や社日に行くこともあり、農耕行事としての側面をうかがわせる。

モモチ分布地図



- ①モモチは、高松市香西町を東端とした香川県西部の多くの地域で行われている。
- ②多くの地域では大人が射手となるが、三豊市南部から観音寺市にかけては子どもが射手となる。
- ③庄内半島とその周辺では、頭屋制や藩斎などのしきたりが現在も守られている。
- ④普通寺市の一部から丸亀市の南部にかけては、弓を射ることはせず祭りだけが行われる。
- ⑤櫃石島のモモチでは、角形的的を使う。

蹴鞠

— 落とさぬ鞠、絶やさぬ伝統 (46)

蹴鞠とは、数人が一つの鞠を用い、定められた作法に従って蹴り渡していく儀式です。その歴史は非常に古く、『日本書紀』には皇極天皇3年(644)に蹴鞠が行われたことが記されており、古代から伝えられてきた儀礼であることが分かります。

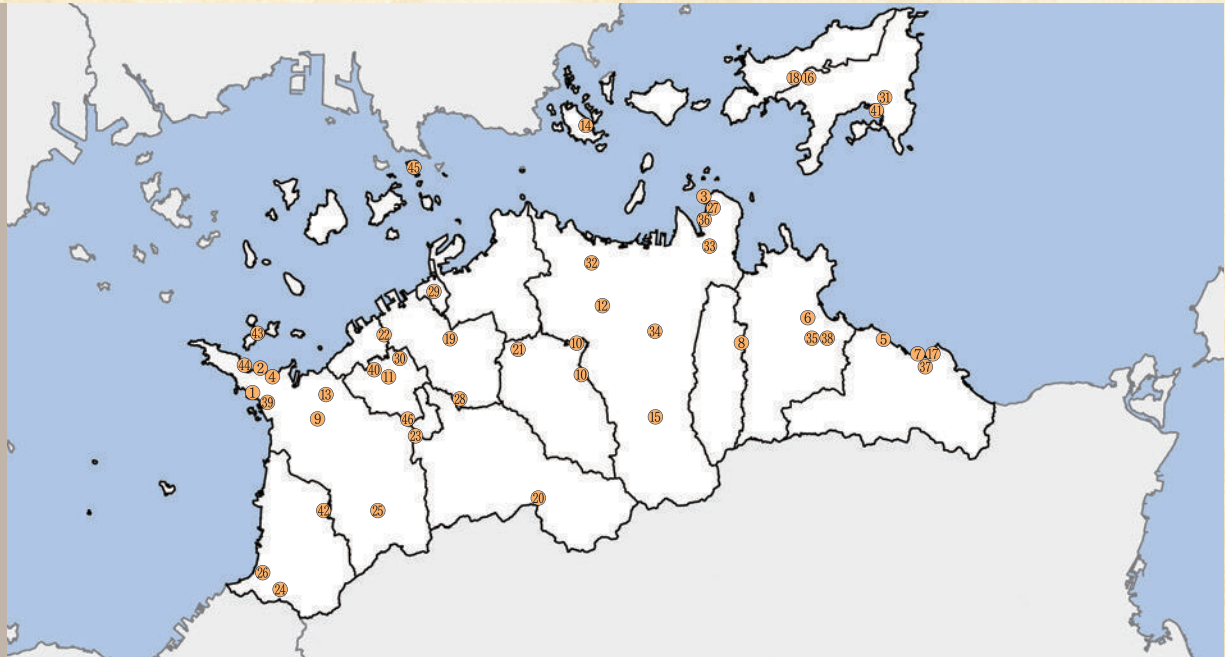
金刀比羅宮においても、古くから蹴鞠が行われていたと考えられ、元文3年(1738)以降、蹴鞠に関する記録が継続して残されていることから、少なくとも江戸時代には奉納行事として定着していたことが明らかです。金刀比羅宮の蹴鞠を行う鞠場の四隅には、式木と呼ばれる4本の木(松・柳・桜・楓)が植えられており、その中央で行われます。



蹴鞠46

香川県民俗芸能連絡協議会について

会員団体分布地図



会員団体一覽

【獅子舞(1p~2p)】

- ① 家浦二頭獅子舞／家浦二頭獅子舞保存会
- ② 小笠原流神田夫婦獅子舞／神田夫婦獅子舞保存会
- ③ 才田岩陰獅子舞／才田獅子舞保存会
- ④ 七宝古流本村夫婦獅子舞／本村獅子舞保存会
- ⑤ 尺経獅子舞／川東尺経獅子保存会
- ⑥ 筒野虎獅子／筒野虎獅子保存会
- ⑦ 虎頭の舞／東かがわ市白鳥虎頭舞保存会
- ⑧ 二條獅子／二條獅子連
- ⑨ 吉津夫婦獅子舞／吉津夫婦獅子舞保存会
- ⑩ 綾南の親子獅子舞／綾南の親子獅子舞保存会
- ⑪ 和唐内獅子舞／和唐内獅子舞保存会

【人形浄瑠璃(3p)】

- ⑫ 香翠座デコ芝居／香翠座デコ芝居保存会
- ⑬ 讃岐源之丞／讃岐源之丞保存会
- ⑭ 直島女文楽／直島女文楽保存会

【農村歌舞伎(4p)】

- ⑮ 祇園座／認定NPO法人農村歌舞伎祇園座保存会
- ⑯ 中山農村歌舞伎／中山農村歌舞伎保存会
- ⑰ 白鳥だんじり子供歌舞伎／東かがわだんじり子供歌舞伎保存会
- ⑱ 肥土山農村歌舞伎／肥土山農村歌舞伎保存会

【念仏踊(5p)】

- ⑲ 坂本念仏踊／坂本念仏踊保存会
- ⑳ 大川念仏踊／大川念仏踊保存会
- ㉑ 滝宮の念仏踊／滝宮念仏踊保存会
- ㉒ 南鴨念仏踊／南鴨念仏踊保存会

【小歌踊(6p)】

- ㉓ 綾子踊／佐文綾子踊保存会
- ㉔ 田野々雨乞踊／田野々雨乞踊保存会
- ㉕ 彌与苗踊・八千歳踊／彌与苗踊保存会
- ㉖ 和田雨乞踊／和田雨乞踊保存会

【盆踊り(7p)】

- ㉗ 庵治踊り／庵治踊り保存会
- ㉘ 岡田おどり／岡田おどり保存会
- ㉙ 鹿島踊り／宇多津鹿島踊り保存会
- ㉚ シカシカ踊り／シカシカ踊り保存会
- ㉛ 安田おどり／安田おどり保存会

【神楽(8p)】

- ㉜ 佐料編笠神楽／佐料編笠神楽保存会

【民謡(9p)】

- ㉝ 石切り唄／石切り唄保存会
- ㉞ 讃岐民謡／讃岐民謡保存会

【太鼓(10p)】

- ㉟ 阿讃峡太鼓／阿讃峡太鼓保存会
- ㊱ 庵治締太鼓／庵治締太鼓保存会
- ㊲ 松原太鼓／松原太鼓保存会
- ㊳ 南川太鼓／南川太鼓保存会

【秋祭り(11p~12p)】

- ㊴ 賀茂神社長床神事／賀茂神社長床神事保存会
- ㊵ 木熊野神社特殊神事／木熊野神社特殊神事伝承会

【祭礼行列(12p)】

- ㊶ 幟さし・ヤッシッシ踊り／馬木郷土芸能保存会
- ㊷ 山本長刀踊／山本長刀踊保存会

【モモテ(13p)】

- ㊸ 粟島ももて祭／粟島ももて祭保存会
- ㊹ 大浜ももて祭／大浜ももて祭保存会
- ㊺ 櫃石ももて祭／櫃石ももて祭保存会

【蹴鞠(14p)】

- ㊻ 蹴鞠／金刀比羅宮蹴鞠会

この冊子でご覧いただいた通り、香川県には豊かな無形民俗文化財が伝承されてきました。各地域の芸能や祭りに情熱をかける人々が率いてきた保存会によって結成されたのが香川県民俗芸能連絡協議会です。本協議会では、各種民俗芸能大会への出演団体の推薦や、継承のための情報交換など、無形民俗文化財の活用事業を実施しています。

発行：香川県民俗芸能連絡協議会(事務局：香川県教育委員会生涯学習・文化財課内)

Tel:087-832-3314 Fax:087-831-1912

監修・コラム執筆：水野一典(香川民俗学会会長・四国民俗学会理事)